慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	スイス中立の再評価とその文献
Sub Title	Die Neutralität der Schweiz in neuem Licht
Author	宮下, 啓三(Miyashita, Keizō)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1969
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.42, No.2 (1969. 2) ,p.104- 112
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19690215-0104

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資料

スイス中立の再評価とその文献

宮下啓三

中立、それはかたるに困難なテーマである。「戦争のない状態」を平和と呼ぶように、「他国と軍事的同盟をむすばず、他国間のあらそいに介入しない状態」を中立と名づけるのはやさしい。だが、「……ではない状態」というように、否定型の文章でしか表現できないものなのであろうか。

中立、それは近時のわが国においてきわめて頻繁に語られ聞かれもする。それなのに、中立とはなにかという根本的な問題がどこかへ置きざりにされている。かりに中立論がたたかわされても、その論議はおおむねきわめて高度の法概念にみちた言葉でおこなわれて一般的な関心をひきよせない。

しかも、中立に賛成する側と反対する側との間で議論の次元がくいちがつているような印象を私はもちつづけている。高次元で抽象的な綱領をかかげながら、具体的な説明によつて国民を啓蒙することができずにいる進歩政党。他方には、中立論の抽象性を攻撃することによつてのみ成り立ちうる低次元の現実論をふりかざす保守政党。それぞれ自前の土俵で相撲をとつているので、四つになつたつもりの取り組みは勝ち負けの判定をつけるにいたらない。

中立論者の言説が概して甘い抽象的理想論と呼ばれる風潮があるのは、中立の功ばかりを強調して中立に必然的にともなう罪の部分ないし危険な部分を意識的に糊塗しているのではないかという疑いの念をおこさせるからであろう。世の多くの人々は政治家や理論家たちとはちがつた現実感覚をもつていて、なにごとにつけ単純な理想的イメージに対して、そればかりではないはずだという懐疑の念をいだきがちなものである。

だからこそ、中立の理想はもつと現実主義的立場から見なおされ説きなおされる必要がある。中立とはなにかを研究する手がかりは国際法理論の分野ばかりにあるのではない。法理解釈と歴史的現実とのふれあい、つまり理論と現実との接点にこそ、虚妄な四つ相撲をとつている中立論と反対論とをたたかわせる場があるにちがいない、と私は確信する。

中立論が理想主義・ロマン主義の童話であるべくもないことをものがたる一例をあげてみよう。国際法的に永世中立をみとめられている国は今日ではスイスとオーストリアの二国であるが、第二次大戦後に四ヵ国の分割占領状態から脱け出して、第二の永世中立国となつたオーストリアは、中立化の声を聞きながら結局は東西対立のかけ引きと軍備増強の犠牲となつて将来いつ統一の可能性があるとも知れない二つのドイツとくらべれば、はるかに運がよい。その反面、地理的・歴史的に西ヨーロッパに属し、経済的にも西側であるはずのオーストリアは、中立国の資格ゆえにNATOに加盟できず、そのため念願のEECに加わることもならず、経済ののびなやみに苦しみ、発展めざましい西ヨーロッパ諸国の経済成長にとりのこされていくつらさを実感しているのである。オーストリアとスイスは境を接し、スイスもまたNATOにもEECにも加盟していない。だが、スイスとその周辺諸国との経済的関係は長い歴史と伝統によつて安定をたもつているし、国際金融の中心地としての実力をそなえている。この点でオーストリアは勝ち目がない。国際金融での役割をスイスから分かちあたえられることはありうべくもないのだから。よしんば「スイスのごとく」というスローガンがかかげられても、隣国オーストリアでさえスイス的中立をのぞみえない。

このように、中立国とひとくちに言つても、さまざまなありようがある。第二次世界大戦後に、アジアとアフリカに相次いで中立国が生まれ、中立主義・非同盟主義・積極中立など、あたらしい中立の概念がつくりだされた。中立はもはや統一的な概念ではなくなつた。当面、これらの新興中立国については論ずるまい。もつとも長い歴史と比肩するもののない実績をもつスイスの中立問題にかぎつて、今日われわれが中立の具体的事例を研究する際に有益と思われる著述を紹介し、スイス一国の中立でさえ大きく複雑なテーマとなりうることを示唆したく考える。

「中立はかつてスイス連邦の国家機密のようなものであつた。スイスの中立を知らぬ者はなく、その価値をみとめぬ者はなかつた。しかし、スイスの中立について論ずる者はなかつた。」

一九六六年の夏、スイスで中立関係の文献をさがしていた私に、チューリヒの新聞記者がこうかたつた。この言葉は真実をするどく言いあてている。スイスは第二次大戦の終るまで、自分の中立が唯一無二の中立の形態であると信じ、中立の理念をスイスのかがやかしい歴史とむすびつけて美化する傾きがあつた。中立はまるで宗教のように、スイス人の精神にしみこんでしまつているようであつた。

そうであればあるなりに、この中立をやすやすと他にゆずるわけにはいかなかつた。じつさい、第二次大戦の嵐のまつただ中にうかぶ平和な島のようにも見え、そのため参戦諸国家からたえず中傷と妬みの目でながめられたスイスにも、中立をゆるさない勢力からの圧力が及んでいた。

すでに一九三三年一月のヒトラー政権確立の時からスイス苦難の時代がはじまつていた。表面ではスイスの中立を保障すると約束し

ていたヒトラーは、かげではスイスの大部分を占めるドイツ語圏にねらいをつけていた。全ドイツ民族の大帝国をつくろうと夢見るヒトラーにとつて、ドイツ語を日常語とするスイス人を例外とするつもりは毛頭なかつた。

ヒトラー・ドイツは、一九三三年から大戦開始時まで、スイスに対してあの手この手のプロパガンダ作戦をおこなつた。これに対してスイスは国民の意識を高揚して、ファシズムの宣伝に抵抗する力をつけさせようと努力した。「精神的国土防衛」と呼ばれる文化活動がそれであつた。ナチズムの感化をうけた行動右翼に対する措置、イタリアからねらわれた南スイスのイタリア語圏での動揺、「非武装中立」を党是としていた社会民主党の「武装中立」政策への転換など、注目すべき現象が大戦開始前のスイスの歴史に多くの頁を割かせることになつた。

第二次大戦勃発の前夜、スイスは「総動員令」を発して臨戦態勢をととのえた。ドイツがスイスに攻めこむと予想された危険の時期は一九三九年から四〇年にかけてと一九四三年の二回あつた。さいごまで抵抗しぬく構えをみせ、アルプスの複雑な地形を利用して長期戦にそなえる覚悟をきめた。この間、中立国ゆえに危険な国を仮想敵国と見なせないために国防軍総司令官の選出や防衛計画の作成などでドイツに攻撃の口実をあたえないよう細心の注意をはらう必要があつたし、避難民保護、参戦国軍の兵員・物資の国内通過をめぐる問題など、中立の資格を問われる難問を解決するのに苦心した。

このようにスイスとその国民が「独立と中立」をまもるために知恵と総力を結集し、さまざまな苦難に堪えたことは、ピエール・ベガンの『ヨーロッパのバルコニー』（一九四八）によつて日本の読者にも知らされていた（*Pierre Bequin: Le balcon sur l'Europe.* 鶴岡千仞訳、岩波書店、一九五二年刊の邦訳あり）。

ベガンの書物は、概して、全体主義の危険に抵抗して中立をまもつたけなげなスイス国民を讃美するおもむきで書かれていた。それはスイス建国以来の歴史がつちかつてきたスイス的民主主義と中立のイデオロギーを無条件に肯定する立場からしるされていた。

しかし、戦後と呼ばれる時期が過ぎ、冷静かつ客観的に歴史資料を整理し、また何らかの理由で公表されずにいた政府機関の文書が歴史家たちの目にふれるようになつたとき、スイスの中立は美化の対象でばかりなくなつた。むしろ、中立を維持するについて生じる矛盾や外交的技術が、あらたに真剣な検討を要する、という認識がふかまつた。私がこの評文に「スイス中立の再評価」という題をあたえたのは、この点について注目を喚起したかつたためにほかならない。

スイス中立の再評価――スイス人の立場からすればスイスの中立のありかたへの反省――の潮流を先導したのはカール・ルートヴィヒがスイス閣僚会議（スイス政府）に提出した、いわゆる「ルートヴィヒ報告」であつた。閣僚会議への報告書のかたちで一九五七年春に公表された『一九三三年から一九五五年にいたるスイスの避難民政策』は、多くのスイス人にショックをあたえた（*Prof. Dr. Carl*

Ludwig Die Flüchtlingspolitik der Schweiz in den Jahren 1933 bis 1955, Bericht an den Bundesrat zuhanden der eidgenössichen Räte.)。ナチス・ドイツへ刺戟をあたえることを避けようとしたスイス政府は、スイスに亡命を希望するユダヤ人たちのスイス入国を意図的に制限し、約四千と推定されるユダヤ人はスイス国境で、ときにはスイス国内からさえも、ドイツへ戻らされたことがこの報告で明かるみに出た。スイスでうけいれられたユダヤ人総数、さらに避難民・亡命者の総数と比較すれば、四千でさえ少ない数字かも知れないが、戦争に関しては汚れない手のもちぬしであると自認していたスイス人の良心をゆさぶるに足る衝撃力を、「ルートヴィヒ報告」はもつていた。

ベガンの著書とならんで、大戦とスイスとの問題をあつかつた記述には、カール・ウェーバーの『神経戦におけるスイス』（一九四八）やエルンスト・シュールヒの『自由が問われた時』（一九四六）などがあつた（*Karl Weber: Die Schweiz im Nervenkrieg. Ernst Schürch: Als die Freiheit in Frage stand.*）。スイスの民主主義と国民精神がスイスをまもりぬいたとしてほめあげるこれらの讃歌は、しかしながら、「ルートヴィヒ報告」のあとでは安んじて書かれない種の書物だつた。

ジョン・キムチの『平和を窺う』（一九六一、英語版）は、のちに『ギザン将軍の両面作戦。一九三八――一九四五年のスイス』と題して独訳された（*Jon Kimche: Spying for Peace/General Guisans Zweifrontenkrieg*）。一九三九年の第一の、そして最大の危険に際して、スイスの議会は「総動員令」を採択し、あわせて国防軍総司令官にアンリ・ギザンを選出した。フランス語圏の民主主義者であるギザンが、当時ナチス・ドイツとの関係をとりざたされていたドイツ語系スイス人ボレルに大差をつけて選び出されたそもそもからドイツは不愉快であつた。しかもギザンが徹底抗戦を首唱して防衛計画をたてたことを、ナチス・ドイツは、スイスが中立をすててドイツに敵対する意志表示をしめした、と難癖をつけた。しかも、スイス政府は極力ドイツ側との摩擦を回避しようとしてギザン将軍との間に意思の疎通を欠き、両者の関係が中立の意義をめぐつてしばしば悪化した。このような事情を掘りおこしながら、キムチはスイスの防衛努力の現実を叙述した。

イタリアが参戦しフランスが降伏するに及んでスイスは完全にベルリン＝ローマ枢軸側に包囲されることになつた。相対立するもののあいだにあつてこそ中立がありうると考えれば、圧倒的な勝利をさけぶ側の勢力からすつぽり囲まれては、中立は事実上なくなつたも同然であつた。こうなると、徹底抗戦の決意はまつたくむなしいように感じられ、スイスはおそかれ早かれ、たたかわずして、ドイツ側に帰順する運命であるように思われても不思議ではなかつた。中立国であるからには救いをもとめる同盟国とてない小国スイスの運命は風前の灯であつた。スイス政府筋が中立を破棄するための国際法上の手つづきについて法律学者に問い合わせた、などと噂されたのもこのころであつた。反抗するか屈服するかの分れ道に立つたスイスが、ギザン将軍のもとで反抗の道をえらぶにいたる、動揺と決断の重大時については、アリス・マイヤー（一九六五）の『順応か、

反抗か』が劇的な筆致を具体的な事実の記述に生かして報告している（*Alice Meyer: Anpassung oder Widerstand—Die Schweiz zur Zeit des deutschen Nationalsozialismus*）。なお、彼女の記述でとくに力点がおかれているのは、大戦中のスイス報道機関の、検閲下における最大限の自由で卒直な記事と論説を国民に提供しようとする努力についてであることを書きそえておくべきであろう。たんにスイス国民だけでなく、外国の反全体主義者たちへの客観的な判断材料の提供に意をそそいだ新聞と放送の役割と功績はたしかに大きい。

報道の中立性に関しては、大戦中チューリヒでニュース解説を担当していた歴史学者ジャン・ルードルフ・フォン・ザーリスの、雑誌『スイス月報』に掲載した回顧録『第二次大戦の世界年代記作者』が傍系の資料として興味ぶかい読みものであることを指摘しよう。（*Jean Rudolf von Salis: Der Weltchronist im Zweiten Weltkrieg. Aus: SCHWEIZER MONATSHEFTE für Politik, Wirtschaft, Kultur. Oktober 1964*）

虚飾なしに中立国の現実の種々相を垣間見せるという意味では、ヴァルター・ブリンゴルフの『自伝』（一九六五）が面白い（*Walther Bringolf: Mein Leben*）。著者はナチス・ドイツ時代から大戦終了後までシャフハウゼンの市長であつた。シャフハウゼンといえば、スイスの北東部に位置して、しかもドイツとスイスを分かつライン川よりも北にはり出す特異な土地にあり、もつともつよくドイツの影響をうけ、その反面ではドイツに対する反撥もまた激しくあらわれる場所柄であつた。だから、ナチスのプロパガンダにあやつられた青年団体「前線（フロント）」の運動がさかんで、これに対立する労働者層の動きも活潑であつた。こういう土地柄をおさめる彼自身が、スイスでもつとも左翼的な首長と呼ばれる特異な存在であつた。シャフハウゼンはまた地理的状況のために米英連合軍の爆撃機の誤爆をうけ、一九四四年春には四十人の即死者を出している。中立スイスの戦前・戦時の混乱と困惑を個別研究するにはシャフハウゼンはもつとも興趣と実りに富む対象であろうし、その際ブリンゴルフの自伝は欠かせない資料となりうる。

これらの著作はそれぞれなりの興味をわれわれにいだかせるが、スイス中立の歴史を研究する際の底本として絶対に欠かせない書物が別にある。エドガール・ボンジュールの『スイス中立の歴史』は、スイス史の初期から二十世紀に及ぶ精細をきわめた中立史の記述であり、その第一巻、第二巻はさいきん改訂三版が出版された（*Edgar Bonjour: Die Geschichte der schweizerischen Neutralität.*）。イデオロギーとして美化され理念化された中立を、歴史学者の客観的な眼でとらえようとするこの労作は、疑問の余地なく、最大のスイス中立史である。

ボンジュールの『スイス中立の歴史』は、さいきん待望の第三巻が刊行され、ただちに版をかさねた（一九六七）。「一九三〇年から一九三九年まで」と、副題された第三巻は、前二巻にまして詳細に中立の現実を報告している。ヒトラー政権獲得時から大戦勃発前夜まで、主として㈠ドイツおよびイタリアに対する中立の主張、㈡国連脱退と絶対的中立への復帰、㈢国内世論の動揺に対する中立維持

の努力と避難民問題、㈣予想される中立侵犯にそなえた防護措置（精神的国土防衛・軍事防衛準備・戦時経済計画など）をあつかつている。

ボンジュールの連作の第三巻は、ベルンのスイス連邦の文書庫（アルヒーフ）の茫大な資料と、政権を担当していた人物たちのプライヴェートな書簡・覚え書の類を精査して生まれたものだが、著者は中立の理想像をそこなわずにいない事柄をもつつみかくさない。中立政策をつらぬくにあたつて政府要人がヒトラーと接触をもつていた事実（閣僚シュルテスの一九三七年二月のベルリン行き）、イギリス・フランスとの微妙な関係（三一五頁以下）など、外交政策史の観点から注意にあたいする。

スイスは第二次大戦の嵐の時期に中立を確保した。戦後、スイス人は戦争に汚れぬ手をかかげて精神的な優越感にひたる風潮があつた。しかし、中立を現実政策としてみるかぎり、みにくい妥協や便宜的措置をともなう外交的技術、しかも本質的にリアリスティックな技術を看過するわけにはいかない。「ルートヴィヒ報告」の公刊を期として、その後に生まれた中立関係の書物が、多かれ少なかれ中立維持の努力がいたずらに讃美されるばかりではいけないことをおしえている。

中立によつて手を汚さずにすんだと自負するスイス人に対して警告を発したのは、右にあげたような歴史資料ばかりではない。精神文化史の立場から中立の神話にかくされた暗い影への反省をうながす論文でとくに注目すべきは、「ルートヴィヒ報告」公刊と前後して発表されたカール・シュミートの『講演・論文集』である（*Karl Schmid: Reden und Aufsätze*）。同じ著者の『小国家での不快』（一九六三）とともに、中立のイデオロギーがスイス人の世界政治に対する現実感覚をくるわせ、世界史のあゆみから自己疎外したスイスが、その国の文化人にどのような精神現象を呈させたかというユニークなテーマがくりかえしてあつかわれる（*Karl Schmid: Unbehagen im Kleinstaat*）。小国家であることと中立であることが、スイス人の精神史の道すじを決定する要因である、と感じているかにみえるシュミートの諸論文は、ひるがえつて考えれば、大きな国が同時に中立でありうるだろうかという難問をもみちびくいとぐちになるであろう。

以上に列挙した書籍・論文はいずれも一九三三年から一九四五年の時期におけるスイス中立の実情を直接・間接につたえるものだが、スイスの中立の一側面である「武装中立」に関して、カール・ブルンナーの『スイスの国土防衛』（一九六六）とハンス・ルードルフ・クルツの『武装中立』（一九六七）を最新の資料として紹介したい（*Karl Brunner: Die Landesverteidigung der Schweiz; Hans Rudolf Kurz: Die bewaffnete Neutralität.*）。ことに前者はA5版六三九頁の大著で、スイスの精神的および軍事的防衛の実際についての有益なハンドブックの役割をはたす。民兵制度の国にふさわしく、ふつうならば当然機密にされるはずの事項まで網羅され、軍隊の構成・各軍事員の行動の細部が詳述されている。この大著の第五章は中立国

スイスが軍事的紛争にまきこまれた場合にとられるべき措置を各種中立協定にてらして具体的に述べており、ジュネーヴ協定の実施細目に関する、百頁をこえる記述は、そのままスイス中立の今日的性格を推察させる。

もとよりスイスの中立をその根本から理解するためには、スイスの歴史、ことに連邦制度の成立と憲法制定史、さらに民族・言語・宗教・文化・経済などの諸面について知る必要がある。しかし、スイスの歴史や政治制度に関する著述は枚挙にいとまがなく、この小文のスペースの及ぶところではないので、スイス中立問題をあつかつた私の小著をまとめるにあたつて参照した書籍のうち、㈠スイス一般について、㈡中立問題について（先述の書目は除く）、それぞれ解説しているものの書名だけを左に列挙する。いずれも第二次大戦後に刊行されたものであるが、それらに先立つて、日本では哲学者とばかり思いこまれているらしく見える法学者カール・ヒルティの古典的な中立論に敬意を表しておきたい。

カール・ヒルティ『今日の解釈におけるスイスの中立』（一八九九）(Carl Hilty: Die Neutralität der Schweiz in ihrer heutigen Auffassung.)

㈠スイス一般について

A・シーグフリード『スイス――デモクラシーの証人』（一九四八）A. Siegfried: La Suisse—Democratie Témoin.（同題による邦訳。吉阪俊蔵訳。岩波新書、一九五二）

シャルル・ジリャール『スイス史』（一九五〇？）Charles Gilliard: Histoire de la Suisse.（同題による邦訳。江口清訳。白水社、文庫クセジュ、一九五四）

ゴットフリート・グッゲンビュール『スイス史』（一九四七―四八）Gottfried Guggenbühl: Geschicht eder schweizerischen Eidgenossenschaft. 2 Bde.

ペーター・デュレンマット『スイス史』（一九五六）Peter Dürrenmatt: Schweizer Geschichte.

パウル・ケーニヒ編『歴史記述の光にてらしてみたスイス』（一九六六）Die Schweiz im Licht der Geschichtschreibung. Hrsg. v Paul König.

ドニ・ド・ルージュマン『スイス、幸福な民の歴史』（一九六五、ドイツ語版題名『スイス――ヨーロッパのモデル』）Denis de Rougement: La Suisse ou l'Histoire dûn Peuple heureux.（Die Schweiz—Modell Europas.）

ドニ・ド・ルージュマン『スイス連邦』（一九五三）Denis de Rougement: La Confédération Helvétique.

エーミール・エグリ編『スイス』（一九五八）Die Schweiz. Hrsg. v. Emil Egli.

フリッツ・ルネ・アルマン『二五のスイス』（一九六五）Fritz René Allemann: 25mal die Schweiz.

マックス・イムボーデン『ヘルヴェティアの病気』（一九六四）Max Imboden: Helvetisches Malaise.

㈡スイス中立問題について

ペーター・グッゲンハイム『国際連盟とダンバートン・オークス

とスイスの中立』（一九四五） Peter Guggenheim: Volkerbund, Dumbarton Oaks und die schweizerische Neutralität.

ゲールト・H・パーデル『ドイツ語圏スイスの政治報道と第三帝国の興隆』（一九五一） Gerd H. Padel: Die politische Presse der deutschen Schweiz und der Aufstieg des Dritten Reiches

ヴァルター・ホーファー『スイス外交の指標としての中立』（一九五六） Walter Hofer: Die Neutralität als Maxime der schweizerischen Außenpolitik.

アーノルド・トインビー／ヴェロニカ・M・トインビー『戦争と中立国』（一九五六） Arnold Toynbee/Veronica M. Toynbee: The War and the Neutrals.

ハンス・コーン『ナショナリズムと自由、スイスの例』（一九五七） Hans Kohn: Nationalism & Liberty; the Swisse Example.

ギュンター・ラハマン『スイスにおけるナチズム』（一九六二） Günter Lachmann: Der Nationalsozialismus in der Schweiz.

なお、経済学にはうとい私なので論評は避けるけれども、中立と国際経済との関係も無視されてはならないと思うので、私が入手した雑誌論文の中で目にとまつたもの二篇の題目だけをここにかかげて御参考に供したい。いずれも『スイス月報』収載の論文で、一つはスイス商事部（日本の通産省にあたる）のパウル・R・ジョレスの『スイスと国際経済協力』、他はヴィリー・ツェラーの『EECと中立国』である。（*Paul R. Jolles: Die Schweiz und die internationale wirtschaftliche Zusammenarbeit. SCHWEIZER MONATSHEFT Juli 1967; Willy Zeller: Die EWG und die Neutralen. SCHWEIZER MONATSHEFT März 1968.*）

中立――それは総じて頻繁に話題になりながら、そのくせ実態についての知識も議論もあまりに乏しい日本のこととて、今こそ具体的な判断資料が多く提出されてよい時ではあるまいか。政党のプロパガンダとしての中立論ではなく、リアルな中立の姿こそ、もつと知られてしかるべきだし、当の私自身が知りたいと切望する。スイスばかりでなく、スエーデン、オーストリア、あるいはスイスをモデルにしたカンボジャ等。あるいはさらに、人口が一千万にみたないこれらの国の中立が人口一億の国に応用されうるものなのかどうかについても私は疑念をいだかずにいられない。理念的には日本の中立化を期待する私でも、いくつかの政党がかかげる中立論の支持をするのにためらいを感じる。このためらいは、否定の心理ではなく、未知のものへの本能的恐怖にちかい。理念と現実の溝を埋めるためにも、専門諸氏の御努力を私は心から待望する。私の本来の専門からは遠いはずのこの分野であえて関連書目の紹介役をつとめたのも、こうした気持のあらわれであつた、と卒直に告白したい。

なにはともあれ、確固たる中立の伝統をきずきあげたはずのスイスの例をとつてさえ、その中立の現実の姿はかならずしも全面的な安定を意味しない。そればかりか、スイス国内では今日、中立のありかたについて自己批判をもとめる真剣な声があがりはじめている。ここに紹介した著作も、たんに過去の事情を暴露するためのも

のではなく、未来へつながる問題の提起でもあつた。ここ数年とみに高まつている国連加盟問題は、中立の消極性を反省し国際問題への積極的寄与をねがう人々の本心なのである。さらには核時代の中立が古典的な中立の観念を否定する要因となるとも考えられる。中立国であるかぎり、スイスはたえず中立問題と取りくまざるをえないのであり、おそかれはやかれ、国連加盟と核武装問題に直接関連した中立論がスイス人の手によつて書かれるであろうことを私は予言しておきたいと思う。

（一九六八年十一月記す）